

# 18世紀朝鮮の理想都市水原の 歴史地理的考察

楊 普景 (誠信女子大学校)

訳 澁谷鎮明

- I. はじめに
- II. 水原の地理的条件
- III. 18世紀以前の水原
- IV. 18世紀後半正祖代の新都市華城の建設：  
韓国的理想都市の建設
  - (1) 新都市建設の社会的背景
  - (2) 華城の建設
  - (3) 華城の空間構造
  - (4) 華城新都市建設の特徴と限界
- V. 水原の変容と近代化
  - (1) 植民地行政中心都市としての水原
  - (2) 伝統的都市景観の毀損と破壊
  - (3) 農業研究および植民地農政の中心地としての成長
  - (4) 開港, 近代的交通手段の設置と水原の変化
- VI. 現代韓国の首都圏都市としての水原
  - (1) 首都圏の拡大と水原の成長
  - (2) 水原華城の世界文化遺産登録と歴史文化都市への志向
- VII. 結語

## I. はじめに

水原 (Suwon・スウォン) はソウルの約40km南方, 京畿道の道庁が位置する行政中心都市である。韓国の6つの広域市を除く地方自治体の中では, 2002年に人口100万人を

超え, 最も大きい都市となる。水原は農業振興庁が位置する韓国の農業研究の中心都市でもある。また韓国の代表的企業の一つである三星電子の工場が立地し, 韓国の産業化と首都圏を象徴する都市でもある。1997年には水原を中心に位置する歴史的城郭「水原華城」が世界文化遺産に登録され, 韓国の代表的文化歴史景観をもった都市と位置づけられる。

水原の歴史は旧石器時代より始まるが, 現在の水原の原型は, 18世紀後半, 朝鮮時代の第22代国王正祖 (1752~1800, 在位1777~1800) の理想的計画都市の建設から始まった。当時の新都市建設は「孝」という朝鮮社会の儒教的価値理念を基盤と名分として成しとげられ, 朝鮮後期の文化的力量が発揮された最大の土木工事であった。しかしより重要な点は, 新都市造成が新しい実学思想, 社会改革, 商業資本の蓄積と市場の発達という, あらたな社会的変化を受容し, 活用する実験場であった点である。水原は王権の儀礼の象徴都市としてだけでなく, 当時の社会と, 地域的連結関係を包括的に受容する交通, 軍事, 産業的機能を遂行する都市として建設された。

本稿は, 朝鮮半島の中心に位置する水原を通じて, 歴史ある都市が時代によっていかに社会的, 時代的機能に対応し, それが空間に投影されてきたのかを明らかにしようとする

---

キーワード：韓国, 水原, 華城, 計画都市, 世界文化遺産

ものである。水原は、地域がもつ空間的特性と立地位置によって特徴ある都市相を表してきた。しかしこのような個性的な都市相は、時代の要求する価値理念を反映した普遍性の集結であるという点に意味がある。したがって水原は、韓国都市の特殊性とともに、歴史的展開をみせる代表的な地方都市としての価値をもっている。

## II. 水原の地理的条件

水原の地形はおおよそ東北方が高く南西方向が低い、ゆるい傾斜を成しており、中心部に八達山が位置する。山が国土の3分の2を占めている韓国では、伝統的に都市は山でとり囲まれた盆地上に立地した。また何重にも山で取り巻かれた地形を選好した。これは何よりも軍事的に防御に有利であったためで、中国や日本と異なり、都市内部に邑城（または都城）を置き、周辺に山城を置く防御体系が発展した。このために韓国は「山城の国」とも呼ばれる。しかし水原は、伝統的な韓国の都市に比して、三方が広く開放されてお

り、地形も平坦で、将来の都市成長を受容することのできる場所であった。特にソウルから南方につながる大路が通過するのに適切な地域であった。このような立地条件は朝鮮時代の一般都市の立地とは明らかに異なっていた。

朝鮮半島の中心に位置する水原は、全羅道、忠清道地域からソウルに上る入口に立地している。朝鮮王朝時代の陸路においては、水原は全国の六大路中、第四大路の中心にあり、同時に西海岸の海路を通じて物産が往来する位置にある。特に王都の政治・経済・文化的勢力圏といえる近郊地域に属しているために、土着勢力だけでなく、新たにここに定着した多様な勢力がみられた<sup>1)</sup>。またここは首都の南を守る防御の役割を担う位置でもあった。20世紀初には京釜線、湖南線、水仁線、水驪線などの鉄道が開通し、現在も水原は京釜高速道路、嶺東高速道路、1番国道、水仁産業道路等の自動車道路と、京釜線、湖南線などの鉄道があり、韓国の南北と東西を結ぶ、交通上の要地でもある（図1、2）。

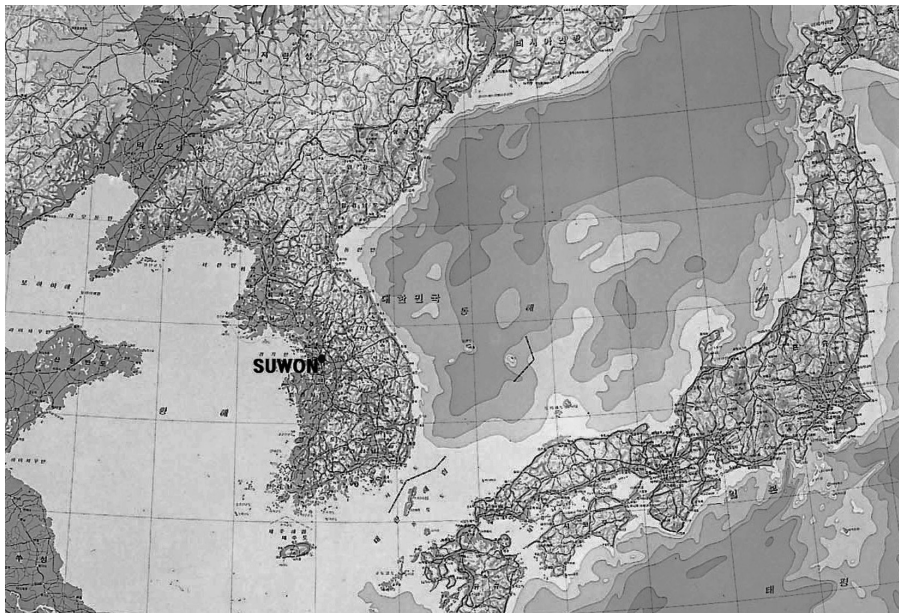


図1 水原の位置

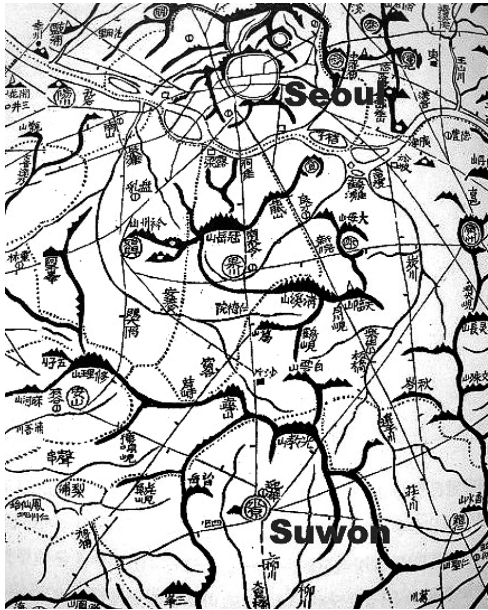


図2 古地図「大東輿地図」(1861)中の水原

### Ⅲ. 18世紀以前の水原

水原は旧石器時代から人間が生活しはじめたが、青銅器時代ないしは初期鉄器時代には馬韓五十四国の中の一つの小国が位置していた。『三国志』魏書東夷伝と『後漢書』東夷伝韓条に伝わる馬韓五十四国の中で、牟水国が現在の水原市地域に位置したものと比定されている。三国時代には百濟・高句麗・新羅の順に古代国家の領域になり、高句麗支配下では買忽または買忽郡に、その後、統一新羅時代である757（景德王16）年に水城郡と改称された。高麗時代には、940（太祖23）年に水州と名称が変更され、1018年に知水州事となり、7つの属県を持った。1271年には水原都護府、さらに水州牧に昇格したが、1310年全国の牧が廃止されたのに伴い、水原府となった。

朝鮮時代に入り、八道制と郡縣制が確立した1413年、水原府は水原都護府に改称された。以後400年近く水原都護府は行政的にあまり大きな変化がなかったが、朝鮮時代後期

の1789（正祖13）年7月に行政拠点である邑治の移転と新都市建設が行われた。現在の京畿道華城市泰安邑宋山里（朝鮮時代後期の龍伏面）花山古邑城近くにあった邑治を移転し、現在の水原市中心部にある八達山の麓に新都市華城を建設することで、水原の歴史と朝鮮の都市史の新たな時代が開かれることとなった。

### Ⅳ. 18世紀後半正祖代の新都市華城の建設： 韓国的理想都市の建設

#### (1) 新都市建設の社会的背景

朝鮮時代の都市は主に性理学的支配論理下で農業社会を基盤として形成された。したがって政治・行政的中心機能を遂行する都市が優勢であった。しかし17世紀以後、都市の様相が変化した。18世紀には封建地主層での産業経営者の発生、自営農民と富農の成長、貨幣流通経済の増大、対外国貿易の増加、一部両班層の没落および市民層の社会進出などの現象を生み出しつつ、新しい都市社会の出現がもたらされた。商業資本の側面からみると、金属貨幣が全国的に流通しつつ、富の偏在が促進され、商業資本と高利貸資本の蓄積が行われ、朝鮮時代後期の商業資本の大規模化がもたらされた。

また17世紀の小氷期による災害、身分制度の動揺、農民層の分解とこれに伴う地方民の都市への移動は、手工業の原動力となるとともに、官営手工業の衰退と独立自営手工業の出現、手工業者の社会進出と資本蓄積、産業の発達と地方都市の商工業育成などの現象にあらわれた。さらに16世紀から徐々に変化しはじめた定期市場は、17世紀後半になって軌道に乗った。

18世紀は、朝鮮後期の文化が開いたルネッサンス期とも称される時期である。この時期には円熟した性理学の開花と、政治的安定を基礎とした多様な両班文化と庶民文化、全国的な生産力の増加とこれにともなう人口

増加が顕著であった。

一方、新しい思想と学問的潮流である実学の発達、西洋世界に対する知識と西学、西洋の地理知識の導入などは多方面にわたって創造的な知識の出現にも影響を及ぼした。

## (2) 華城の建設

朝鮮時代後期を代表する啓蒙君主である正祖は、1789年10月、父の荘献世子の墓所を水原の邑治である花山の近くに移転することとし、墓所の名称も永祐園から顕隆園に変えた。顕隆園への移葬と邑治の移転計画が確定すると、まず隣接地域の広州に属していた日用・松洞の二つの面を水原府に属させるなど、行政区域を改編し、旧住民の移住費用として10万両を支援した。また水原周辺の5つの郡縣の住民に税と身役、戸役の減免などの特別措置が施された。水原の旧中心地に新しい墓所を造成し、これに伴って水原の邑治を八達山麓に移転させることとし、行宮・官庁・郷校（儒学教育機関）・民家などの建設作業が行われ、1790（正祖14）年5月に新しい邑治の施設が完成した。そして同年9月に顕隆園の東方1kmのところに、顕隆園を守護する龍珠寺を創建した。

1793（正祖17）年1月には水原を華城に名称変更し、留守府に昇格させた。これにより新都市華城は、既存の開城・江華、そして1795年（正祖19）に留守府に昇格した広州とともに、首都漢陽（ソウル）の東西南北を取り巻く形で四留守府体制を成し、朝鮮時代後期の行政都市として、行政・軍事上の地位は大きく上がった。華城留守は開城・江華留守よりも一等級高く、首都である漢城府と同一の正二品の官員を任命し、財政基盤の面でも他の留守府よりも優勢であった。

特に華城は首都漢陽の次に重要視された。八達山の麓に移転された新都市華城には、正祖の絶対的な支援の下で、576間の規模をもつ朝鮮最大の華城行宮をはじめとし、官庁・

駅・店舗・商店街・道路・橋梁・亭・植木などの都市基盤施設が建設された。

1794年には国力を傾注して総延長4,600歩（5.7km）にわたる華城の城郭を築造した。正祖は、すでに1792年に進歩的実学者である丁若鏞（1762-1836）に、華城建設に対する基礎資料を調査させ、その設計を指示していた。正祖は華城を実用的な城郭として築造しようとする意図で、若い実学者に城郭建設計画を任せたとのである。

華城は水原の中心部にある標高143mの八達山の東側に立地した。華城の東側と西側は山地の自然地形をそのまま利用し、北側と南側は平地に城を築いた。築城は韓国と中国の城制の長所を採用している。中国の城制の長所としては、レンガの使用と「空心墩」のような施設物をあげることができる。また挙重機（クレーン）、轆轤、游衡車、滑車、各種の車など、新しい科学機器を使用した点が特徴である。総工事期間は10年計画から34ヶ月に短縮されたが、これには、クレーンなどの科学機器を利用した点と、成果給制による動機づけが生産性を高めたことが決定的に作用した<sup>2)</sup>。

朝鮮建国初期に、首都である漢陽を建設（1394年）してから400年ぶりに、漢陽に比肩する立派な都市を2年余りの短期間で建設したことで、中興を迎えた朝鮮の国力を遺憾なく発揮した、華城の城役は正祖の王権強化と、朝鮮王朝の中興を象徴し、推し進めた国家的事業であった<sup>3)</sup>。

## (3) 華城の空間構造

### 1) 東向きの官庁配置

朝鮮時代初期から都市の空間構造は、儒教的な礼儀秩序を都市に具現する原則が打ち立てられていた。都市はできる限り一つの「主山」をおき、官庁は主山の下に南向きで配置され、その前には東西方向の幹線道路が設けられた。官庁で最も地位の高いものは「客

舎」であった。客舎には王を象徴する「殿牌」がまつられ、都市の行政官である守令が一日と十五日にここで礼を行った。客舎の横には守令の執務する東軒と付属官庁があった。また都市の外郭、主山の東と西の麓には、孔子の位牌をまつる文廟と教育機関である郷校、そして社稷壇が置かれ、北側の麓には城隍壇と厲壇が設置された。官庁の坐向、すなわち建物の向く方向は、王が北を背にし、南を向いて座る（南面）ように、王の命令を執行するため南に向いた。

新都市華城の基本的な都市構造は、朝鮮時代の都市構造をそのまま維持継承した。しかし、新都市水原が伝統的都市と決定的に異なっている点は、都市全体の坐向が南向きではなく東向きであったという点である。特に官庁は東に向いており、官庁の向きと直角方向に作られた幹線道路が南北方向に作られた。水原を新しい場所に移転した理由の一つは、産業活動が活発な新都市を建設することであった。すなわちソウルと主要穀倉地帯である三南（慶尚・全羅・忠清道地方）をつなぐ交通の中心地に新しく水原を建設したのである。したがって、この都市で重要視されていたのは、ソウルと南部地方をつなぐ幹線道路であった。都市が南向きに作られると、都市を貫通する幹線道路は東西方向になり、ソウルから直線でつなげることができなくなる。ここから水原新都市が、儒教的秩序の維持という朝鮮時代初期の都市観よりも18世紀朝鮮社会が要求する経済流通という実質的価値観によって作られたことがうかがえる<sup>4)</sup>。

## 2) 地形と住民に配慮した柳葉形の城郭

華城の城郭の形態は、基本的に不規則な形態である。円形や四角形にこだわらず、山が多い地形に合わせ、城郭を自然につなげるのは韓国の城郭の特徴でもある。特に華城の城郭形態は横に長くやや変形した、春の柳の葉に似た形態であった。城郭を直線にせず、幾度も曲げ、柳の葉、あるいは「川」の字に似

せた、地形に合わせた自然な城郭の形態は、正祖の命によるものであった。正祖は八達山南方の小川の名が「柳川」であることを城の形態にも反映させ、またすでにあった北門付近の人家を撤去しなくてよいように、城郭を三ヶ所にわたって屈曲させた。これは基本的な城制よりも住民を優先した正祖の哲学が反映したものである（図3）。

## 3) 十字型街路と河川浚渫

朝鮮時代に、都市中心部分の街路を十字の形態にしたケースは、華城以外にはほとんど見られなかった。これは、前述のように主山である八達山の東方に官庁を配置したために可能になった街路構造であった。さらに「新作路」という第二の街路を造成し、副次的な道路交通を試みたことも、それ以前の都市では見出すことの難しいスタイルであった。十字形の街路が都心部の円滑な交通に備えたものであれば、この「新作路」の建設は、都心から都市外郭までの交通を念頭に置いた道路計画である。都心を貫通する河川の浚渫もまた、以前とは異なるものであった。それ以前の都市が、主に城内の水を城外に出すという消極的な水利管理にとどまっていたのに比べ、華城では遠い水源地から水をひき、これを城内に貫通させる積極的な水利政策を推進した。城郭の周辺に貯水池を建設したこともやはり、この都市の安定した経済基盤の確保を念頭に置いた、果敢な水利事業であった<sup>6)</sup>。

## 4) 王位の象徴空間、朝鮮最大の行宮と軍營の再編

正祖はまた、国王直属の親衛隊である壮勇營を創設し、漢陽（ソウル）と水原に内・外營をおいた。留守府として華城を新しく建設し、行宮と軍營を設置したことは、王の背後にしっかりとした背景を置くことで、強い勢力をもっていた両班官僚層勢力を牽制するためであった。王と王室、王の家族が一時的に訪問したり、長期間滞在したりするための建物である行宮は、国王の権威を象徴する空間

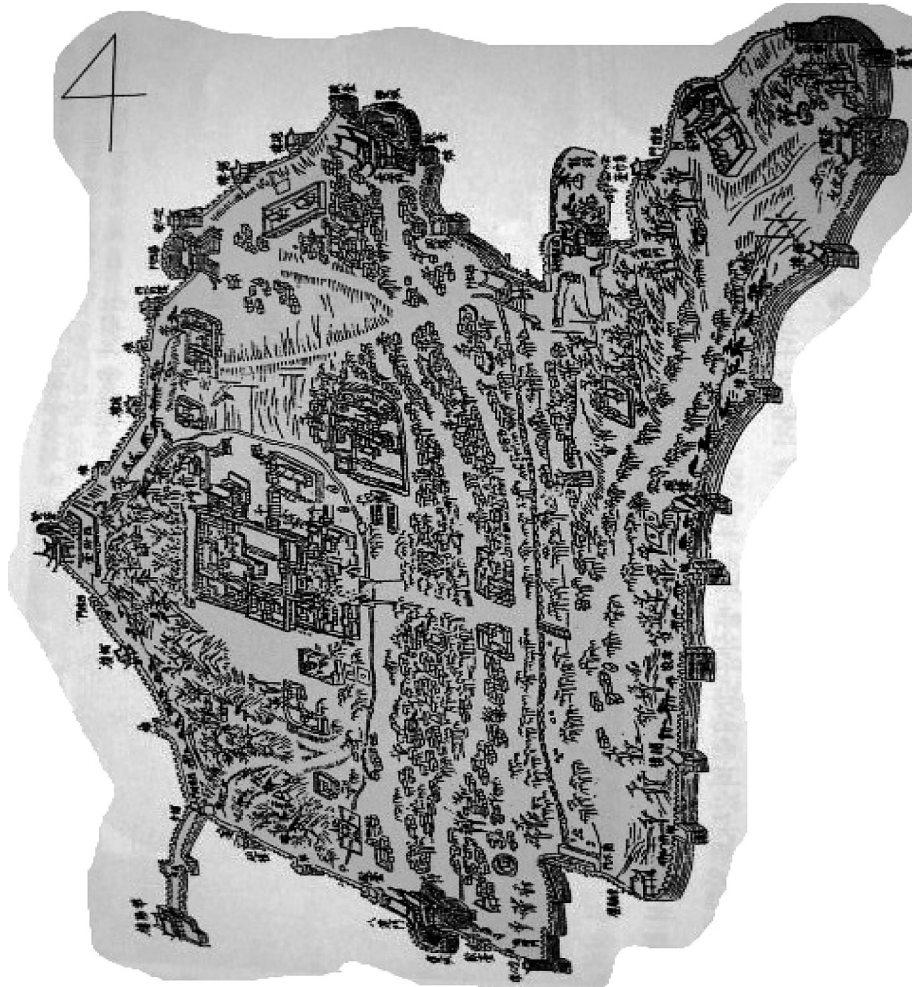


図3 地形に合わせて住民の便宜を図ったため、不規則な形態となった水原華城城郭  
 (『華城城役儀軌』中「華城全図」)

である。行宮の存在は都市の地位を高めるのに寄与した。華城の中心の建築物は華城行宮と官庁であり、行宮は朝鮮最大であった。華城行宮は改革的な啓蒙君主、正祖が志向した王権強化政策の象徴として政治的・軍事的な大きな意味をもち<sup>7)</sup>、華城が王を頂点とした封建的秩序維持を基盤としたことを示している。

#### (4) 華城新都市建設の特徴と限界

華城築城は、正祖の父に対する「孝」から

出発し、またそれを名分としたが、当時の社会・経済・政治的諸条件の中で、正祖を頂点とする官僚・学者・技術者・住民がともに作った近代的新都市であり、実学の結晶体であった。華城は光教山・水原川のような自然と、人工湖・城郭のような人工物が調和できるように計画された。これは朝鮮時代最大の土木工事であり、城郭自体各々異なる50あまりの施設物からなる「城郭の花」である。華城は自然と人工物が調和し、そして自足的新都市を志向した、祖先のすぐれた知恵を実現

したものである<sup>8)</sup>。華城には大都會としての行政、軍事機能と消費機能、生産機能などが備わっており、華城の都市計画は華城の特殊な都市的役割と機能に留意して立案された。華城の全ての施設物は人工物と自然の調和、新技術と伝統技術の融合、平常時と非常時の各機能の結びつきなどが考慮され、機能的でありながらも洗練された姿を備えていた。正祖時代の文化的力量は、人工的施設物が地理的条件と地形、自然環境などを十分に活用しつつも、それとの調和を成し、美しい外観と実用的機能性をともに持たされていた<sup>9)</sup>。

しかし何よりも、新都市の発展のために正祖が華城に行った商工業振興政策は、性理学と道徳哲学を基礎とした農業経済社会であった朝鮮において、画期的な政策であった。正祖は当初、1790年に商業資金6万両を支援して八つの市廛を設置するとともに、城内外南北二ヶ所の市場を開設し、商業都市としての基盤をつくった。また手工業発展のために4千両を支援して製紙の先進地方である安城の紙匠を誘致し、紙生産の活性化を試みた<sup>10)</sup>。特にソウル南方で果川を経由する既存の交通路以外に、始興、安養を経由する新作路である始興大路を開設した(図2)。これを通じ、華城新都市を媒介として三南地方とのより円滑なつながりを図り、華城の商業勢力を養成し、華城を新しい商業都市として登場させた。また失敗に終わったものの、華城新都市では新しい形態の国際貿易市場を開設しようとする試みも行われた。

一方、正祖は華城府に大規模な堰堤と、国营農場とも言える屯田<sup>11)</sup>を設置・運営した。すなわち1795年(正祖19)に造成された萬石渠(現在の日旺貯水池)をはじめ、萬年堤(1798年)・祝満堤(1799年・西湖)など大規模な水利施設築造と、大有屯・祝満堤屯などの屯田設置がそれである。以前にはなかった大規模な堰堤築造と模範農場、屯田の経営で、当時最新の農業技術と先進的な農業経営

を通じ、高い生産性を達成することで、華城の財政と経済的基盤を拡充し、水原府地域を全国的な農業先進地域に変えた。水車など外来の機械と水利技術が試され、また両班層も商業に従事する革新的措置がとられ、朴趾源(1737-1805)、朴齊家(1750-1805)らの両班商人論がここで現実化された。大規模水利施設を備えた国营模範農場では、水車のような最新の農業機械が試され、二人の農夫が協力する方式の「二人通力合作」の共同営農法が実験された。この時から水原は韓国の農業史、及び農学史の1ページを開き、今日の水原が農業研究中心都市として位置づけられる契機となった<sup>12)</sup>。

正祖は父の新しい墓所である顕隆園に参拝するために華城に頻りに訪れたが、13回にわたる訪問を通じ、正祖は一般住民と直接対面し、人民の願いを王が直接受けるといふ、画期的かつ民主的な機会を作り、当時の社会問題を把握し、これを基礎に改革的な政策を樹立する契機とした<sup>13)</sup>。

華城の城郭はまた、それ以前まで韓国の邑城で使われてこなかった防御施設を開発して設置した点と、レンガを部分的に使用して城郭を築造した点が特徴である。華城の規模は周囲約5.4km、城壁の高さ5m程度、胸壁の高さは1.2mである。華城には4つの大門(長安門(図4)、八達門、蒼龍門、華西門(図5))、4つの敵臺、5つの暗門、2つの水門、2つの隠溝、2つの将臺、2つの弩臺、3つの空心墩(図6)、1つの烽燧(狼煙台)、4つの角楼、5つの砲楼、5つの舖楼、8つの雉、3つの舖舎、甬道など、多様な防御施設とともに、当時の文化的力量を示す美しく洗練された建築の造形美を創りだした。

なお、華城新都市建設の全ての過程は、『華城城役儀軌』(10巻10冊)という完璧な工事報告書として整理されている。この文献には華城全図、各建物の設計図、科学機材と付



図4 水原華城の北門：長安門

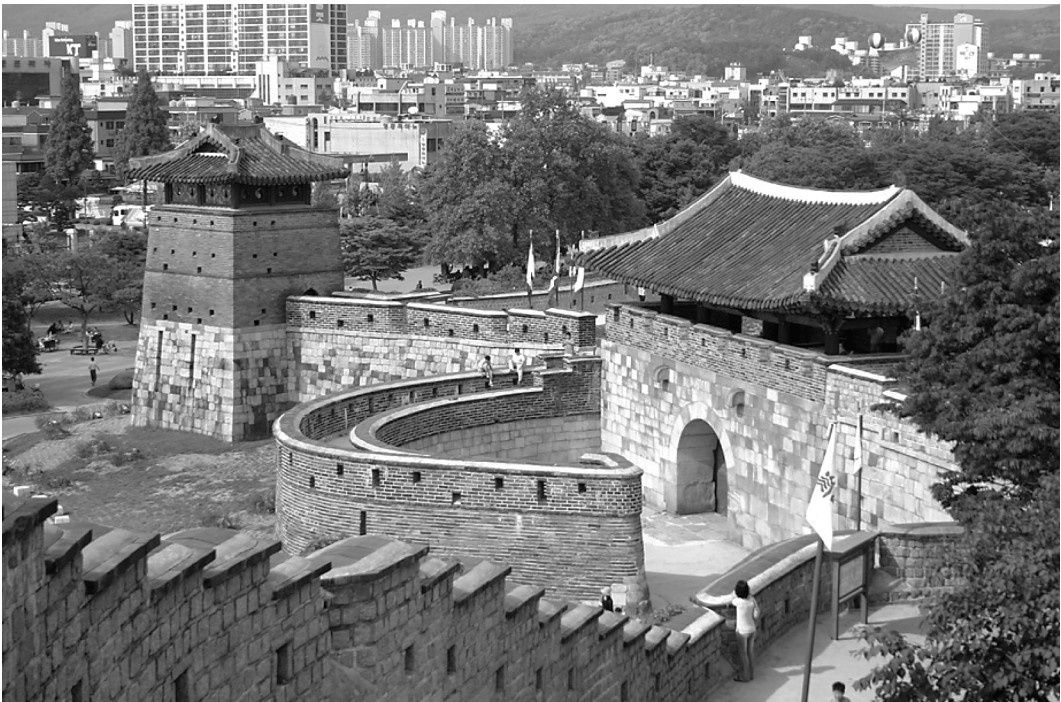


図5 水原華城の西門：華西門





図6 東北空心墩

属建物の図、大工・左官・石工・画工などの氏名、資材の量、費用など全ての事項が記録されている。このような資料があり、華城の建設過程においては手抜きや不正を原則的に排除しただけでなく、万一毀損された場合でもいつでも完璧に復元できる文化遺産としての特徴を華城に付与することとなった<sup>14)</sup>。

水原は明らかに伝統的都市と異なり、自足的な経済都市、流通都市、商業都市としての開放的性格を備えた新しい都市であった。しかし水原は、既存の閉鎖都市としての象徴空間の体系をも反映していた。これは近代都市へと移行していく過渡期的な段階として、富の蓄積による都市発展の契機となったものの、築城によって邑治内部だけに都市を限定することによって、それ以上の都市拡散が困難であったという側面があるためである。築城を通じて王朝中心体系の伝統的価値観をそのまま実現した点<sup>15)</sup>は、18世紀朝鮮社会が

もつ革新性の限界とすることができる。また国王による上からの都市計画であったため、正祖の死後、持続的な都市発展に限界があった点も指摘されている。

## V. 水原の変容と近代化

### (1) 植民地行政中心都市としての水原

1876年に開港した朝鮮は、1894年の甲午改革、乙未改革によって全国的な行政区域改編を実施し、八道制を23府制に改編した。朝鮮時代に持続されてきた府・牧・郡・縣の等級を廃止し、全てを郡に画一化し、337の郡を置き、23府に属させた。この時水原は二等郡となり、地位が低くなった。1896年、再度23府制を廃止して13道制を実施し、水原は二等郡のまま、京畿道の治所となった。これによって行政官庁である道觀察使が設置され、各種付属機関など、新しい行政機関が形成される契機となった。

1910年の韓日勅約（韓国併合）以後、韓国の地方行政区域は1914年4月1日に13道12府220郡2,512面に改編された。これによって500年あまり続いた朝鮮の伝統的な地域単位であった郡・面・里の約3分の1が廃止され、近隣地域に統合される大々的な地方行政区域改編が行われた。行政区域統廃合によって水原は西南に位置した南陽郡を併合することで面積を拡大し、西海岸に直接面する、広い地域を持つようになった。

1917年の面制、1920年の指定面制の新設で、日本人が多く居住し、財力が豊かで比較的都市的である24の面が指定面に設定された。京畿道の場合、水原郡水原面、開城郡松都面、始興郡永登浦面が指定された。水原面が、現在ソウル市に属する永登浦面、高麗の首都であった開城の松都面とともに最も大きな規模の中心地であったことを反映している。1931年、既存の面制を邑面制に改編することに伴い、水原面は水原邑となった。

水原の中心地である水原面には、1910年に水原郡全体の人口の9%が分布したが、1915年には約13%となった。また水原郡全体の人口増加が12%にとどまっているのに比べ、水原面は約34%増加し、中心地への人口集中現象が進んだことを示している。一方1925年の

人口調査結果によると、韓国人の比率が伸びなかった反面、日本人は23%増加し(表1)<sup>16)</sup>、植民地行政中心都市になっていったことを示している。

植民地期（1910～1945）に、韓国の都市は日本の植民統治と植民政策をもとに改編され、当時の大都市はソウル、平壤、大邱を除いて全て港湾都市であった。日本は食糧基地と商品市場としての韓国を作り上げたが、都市はその先導的な役割をするように考えられたためである<sup>17)</sup>。植民地期に韓国の都市は近代的都市化を経験したが、植民地都市化の様相を呈したこともまた、明らかになっていった。この時期の都市を4つの類型に分類してみると、第一に植民地経営の行政中心地として都市化が進んだケース、第二に消費市場の拠点として都市化が進むケース、第三に韓国の原料を日本に輸送していくために便利な交通上の要地に都市化がおこるケース、第四に日本の大陸侵略の兵站産業基地建設によってできた産業都市などである<sup>18)</sup>。水原はすでに形成されていた歴史的都市を植民地経営の行政中心地として強化したケースである。

## (2) 伝統的都市景観の毀損と破壊

正祖の死後も、継続して王と朝廷が関心を

表1 1910～1930年代における水原の人口変化

		1910	1915		1925		1935	
水原郡	戸	15,375	16,085		26,116		30,901	
	人口	74,661	85,705	12.8%	147,781	42%	173,187	14%
水原面 (水原邑)	韓人	戸	1,950	2,228		1,908		?
		人口	5,716	9,903		9,250		?
	日人	戸	360	218		307		?
		人口	1,247	791		1,285		?
	其他	戸	3	6		23		?
		人口	8	18		59		?
水原面計	戸	1,989	2,452		2,238		2,776	
	人口	6,971	10,712	34.9%	10,584	-1.2%	14,054	24%

注：朝鮮総督府，1911，1914年「朝鮮総督府統計年報」，朝鮮総督府，1925，1935年「朝鮮国勢調査年報」。

%は増加率。柳智恵，1992，前掲論文，p.79より

持った華城の伝統的都市景観は、植民地期に大部分破壊された。日本は1910年の韓国併合後すぐに「朝鮮邑城撤去施行令」を施行した。その結果全国の約300あまりの邑城が撤去され、続いて宮城が撤去された。ソウルの景福宮など大部分の宮殿などが、相当部分破壊され、昌徳宮は火災によって大きな被害を受けた。その中でソウル宮殿の品格を維持した華城行宮もやはり撤去がはじめられた<sup>19)</sup>。

1918年に刊行された地形図上には、慈恵医院、郡庁、警察署、法院支庁、守備隊医務室などの行政官庁、普通学校、簡易農業学校などの教育機関などが、行宮の周辺に入り込んでおり（図7）、18世紀後半の王権強化と改革王政の象徴物として建築された旧行宮の雄壮で趣きのある姿が忘れ去られていたことを示している。特に旧韓末まで時に国王が来訪して滞在した570間あまりの華城行宮は、洛

南軒一棟だけを残すだけであり、城郭を除いた大部分の伝統的景観は消え去ってしまった。

### (3) 農業研究および植民地農政の中心地としての成長

朝鮮政府は1884年、ソウルに農務牧畜試験場、1905年には大韓帝国政府がソウルに農事試験所を設置し、農業改革を主体的に推進しようとした。1906年6月、統監府は水原の西屯洞に勸業模範場を設置する工事をはじめ、大韓帝国農事試験所を廃止したが、大韓帝国政府の強力な要求によって当時工事中であった勸業模範場は大韓帝国政府に移管され、1907年3月、大韓帝国勸業模範場が正式に活動を開始した。

日本は、水原地域のよく整備された水利灌漑施設などの農業基盤を利用し、植民地農政



図7 1918年の5万分の1地形図にみる水原中心部

を展開した。勤業模範場の設置とともに周辺の旧屯田跡は日本人地主に払い下げ、大規模農場が運営された。水原地域の多くの土地と商権が日本人に渡され、日本人地主は大地主となった。1906年に国武合名会社、1907年に東山農事株式会社、東洋拓殖株式会社の東拓農場が代表的なものであり、日本の農業移民の移住も増加した。東拓は1918年、土地調査事業が終了するころには74,000町歩を所有し、小作農が150,000名になった<sup>20)</sup>。

1920年代に入ると、水原地域の全ての重要な商権も日本人に蚕食されていた。水原面内の市場で重要な商店の運営はほとんど日本人が占有していた<sup>21)</sup>。

#### (4) 開港、近代的交通手段の設置と水原の変化

1883年の開港、1899年の韓国最初の鉄道である京仁線鉄道の開通などで、首都ソウルの西に位置する仁川は、押し寄せてきた西洋勢力を迎える首都の関門として、急速に成長した。これによってソウル南側の内陸に位置した水原は相対的な衰退を経験した。

しかし1905年ソウルと釜山を結ぶ京釜線鉄道が開通し、同年9月に釜山と日本の下関をつなぐ釜関連絡船を仲立ちとして、京釜鉄道と日本の鉄道をつなぐルートができた。また11月には京釜鉄道と軍用鉄道であった京義線(ソウル龍山～新義州)の連絡運行が始まることで、水原は全国的な鉄道網の中に入り、高い接近性を持つに至った。続いて1931年、東方にある京畿道内陸の米穀生産地 州を結ぶ水驪線、1937年には水原と仁川を結ぶ水仁線など、私営鉄道が開通することで、水原は朝鮮時代の伝統的陸上交通路の中心から、再度鉄道交通の中心地になり、その重要性も高まった。

しかし大部分の先進国の鉄道が、国内市場を形成し、関連産業の技術発達を促進することで、雇用を創出し、また住民の移動と文化

の伝播過程を通じ、近代的な意識を拡散する役割を担ったとすれば、韓国の鉄道は韓国の経済を日本の経済圏に編入した歴史的証拠であり、このような特殊な歴史をもった韓国の鉄道に水仁線<sup>22)</sup>と水驪線があった。

1896年、および1898年に国王高宗の命によって、ソウル以外で最も早く設置された2つの小学校ができ、1904年に設立された農商工学校(1906年に水原農林学校に改称)、1909年には水原商業講習所が開設されるなど、20世紀初まで水原は国家の関心が高い文化的先進地域であった。しかし水原は、20世紀前半の植民地期に、京畿道の行政中心地としての確固たる地位を築き、日本の食糧生産基地となった朝鮮農政の中心地であり、鉄道を通じた京畿道内陸農産物搬出の基地となった。

## VI. 現代韓国の首都圏都市としての水原

### (1) 首都圏の拡大と水原の成長

1949年8月、水原邑が市に昇格するのにもない、水原邑を除いた地域は華城郡と改称され、現在の水原市は過去の水原府のほんの一部分になる。

1950～1953年の朝鮮戦争で韓国全域はほとんど廃墟となり、水原も大部分の都市施設が破壊された。戦後の復旧作業中、ソウルにあった京畿道庁が、1967年水原に移転し、新たな変化への転機が訪れた。道庁の移転と1970年代の強力な経済開発と産業化の推進で、水原は三星と鮮京などの大企業の生産基地となった。また1970年の京釜高速道路、1975年の嶺東高速道路の開通、1970年代以降推進されたソウル市の工業分散政策で工業団地の立地、さらには1980年代以後の大学の地方キャンパス設立により、水原の人口は、1974年20万人を突破した後も人口が飛躍的に増加し、2002年に人口100万人を超えた(図8)。現在は首都圏の過密抑制圏域となり多くの規制を受けているが、ソウルの衛星都市としての性格を持ちながら成長を続けている。

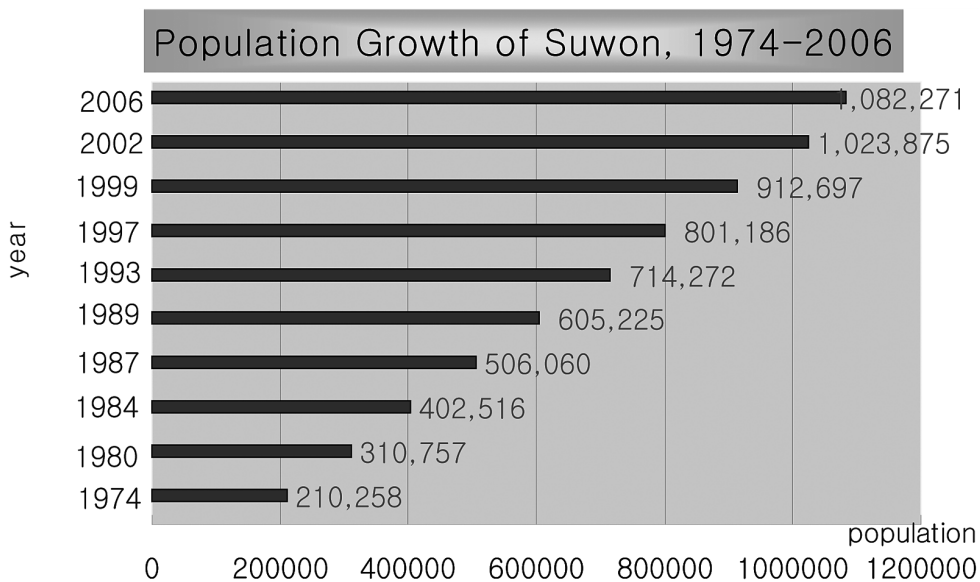


図8 水原市の人口変化（1974～2006）

## (2) 水原華城の世界文化遺産登載と歴史文化都市への志向

水原華城はソウルの昌徳宮と宗廟，慶州の仏国寺と石窟庵，海印寺の八万大蔵経版木および版殿などに続き，1997年世界文化遺産に登載された。当時華城は世界遺産登録基準である「①一つの時代や一つの文化圏を通じ，建築，記念物，文化環境部門で大きい影響力を行使したもの」と，「②消滅した文明や文化伝統について，独特であるか，まれな事例，少なくとも例外的な証明になるもの」という根拠によって登載された。

特に世界遺産委員会の執行理事会は「華城は東西洋を網羅し，高度に発達した科学的特徴を等しく兼ね備えた近代初期の軍事建築物のすぐれた模範である」とし，国際記念物遺跡協会は「華城は18世紀軍事建築物を代表し，ヨーロッパと極東アジアの城制の特徴を統合した独特の歴史的重要性を備えている」と述べた。そして「華城の歴史は200年に過ぎないが，城郭の建築物が同一のものがなく，それぞれ異なった芸術的価値を持ってい

ることが特徴である」という調査委員の指摘もあった。これを契機に水原市は歴史文化都市として個性と特徴を蘇らせるために現在多くの努力を積み重ねている。

## VII. 結語

水原は，朝鮮王朝時代以後現代に至るまで，時代の変化の中で過去という時間の層が累積してできた地域の特性を統合しながら，都市としての機能を発揮してきた点で注目される。しかし現在，文化歴史都市として位置づけられている華城の意味は，地理的な側面から見るならば，より拡大されなければならないものと思われる。華城は，狭い意味では城郭そのものだけを示すが，広義には城郭に属する50あまりの付属施設はもちろん，官庁・道路・商店・橋梁などのような都市基盤施設，貯水池・屯田などのような生産基盤施設，そしてその中で生活を営んでいた人々が作り，残してきた有形・無形の文化遺産，華城築城過程で新たに創造されたさまざまな技術，有形・無形の文化伝統をまとめて指し示

すことができるからである。したがって新都市を囲んでいた「華城城郭」, 「軍事文化遺産」として指定された世界文化遺産としての概念を超える, より広い意味の地理的・文化的概念として都市の発展を追求しなければならないであろう。

〔注〕

- 1) 水原市, 『水原の同族マウル』(韓文), 2006, 31頁。
- 2) 水原市, 『水原華城行宮』(韓文), 2003, 34～35頁。
- 3) 柳奉鶴, 「華城建設の意味と水原の文化遺産」(韓文), 韓神大校柳奉鶴教授ホームページ, 2000, <http://yoobh.korhistory.or.kr/myView.asp>
- 4) 金東旭, 『実学精神で立てた朝鮮の新都市, 水原華城』(韓文), トルベゲ, 2002, 40～43頁。
- 5) 『華城紀蹟碑』(韓文)。
- 6) 前掲4), 195～196頁。
- 7) 前掲2), 60頁。
- 8) 前掲2), 36頁。
- 9) 前掲3)。
- 10) 崔洪圭, 「華城の足跡」(韓文), 華城市ホームページ, [http://www.hscity.net/02\\_hscity/contents\\_iframe.jsp?vHMCD=HM2146](http://www.hscity.net/02_hscity/contents_iframe.jsp?vHMCD=HM2146)
- 11) 屯田は軍事的な要地や辺境地域の軍事費用を充当したり, 地方官庁の運営経費を準備したりするために設置した土地である。
- 12) 柳奉鶴, 『夢の文化遺産, 華城—正祖代の歴史・文化の再照明』(韓文), 新丘文化社,

1996, 96～97頁。

- 13) 韓相権, 『朝鮮後期社会と訴冤制度』(韓文), 一潮閣。
- 14) 前掲3)
- 15) 柳智恵, 『水原市の景観変化: 朝鮮後期以後から日帝期までを中心に』(韓文), 誠信女子大校 修士学位論文, 1992, 2頁。
- 16) 前掲15), 79頁。
- 17) 金儀遠, 『韓国国土開発史研究』(韓文), 大友図書, 1983。
- 18) 金泳鎬, 「近代都市化の歴史的起点」(韓文), 『都市問題』8月号, 1967。
- 19) 前掲3), 161頁。
- 20) 金容燮, 『韓国近現代農業史研究: 韓末・日帝下の地主制と農業問題』(韓文), 1992, 一潮閣, 257頁。
- 21) 李東根, 「1910～1920年代植民農政の地域的展開と地主制—水原地域を中心に」(韓文), 『史林24号』, 180～185頁。  
酒井政之助, 『水原』, 123～126頁。附録の「水原商工業者著名案内」には水原面を中心に60戸あまりの商店が記録されているが, 大部分は日本人が経営していた。
- 22) 尹玉旻, 「水仁線鉄道の機能変化に関する研究」(韓文), 『地理教育論集』, 28, ソウル大校地理教育科, 1992, 31～32頁。  
満州事変と(1931)前後から日中戦争(1937)までの私営鉄道は戦時資源の開発と重工業などの軍需産業の移植で第一次世界大戦前後を凌駕する進展を見せた。水驪線と水仁線もちょうどこの時期に建設された。